

《 論文の内容の要旨 》

論文題目； 伊達宗城 — 「大名同志会」から「賢侯クラブ」へ —

氏 名； 朴 智 泳

本論文は、幕末・維新时期における活躍の重要性にもかかわらず、ほとんど注目されることのなかった伊達宗城を中心として明治維新前後の歴史に幾度も登場し、活躍した一群の大名グループについて 主に宇和島伊達家の関連史料を用いて検討したものである。

この大名グループは、現在の学界では「有志大名」、「一橋派大名」、「公武合体派大名」、「公議派大名」、「賢侯」などの様々な名で呼ばれているが、当時においてはほぼ同一人物たちによって構成され、維持されていた。初期におけるメンバーには、水戸の徳川斉昭、薩摩の島津斉彬、越前の松平慶永、佐賀の鍋島斉正、土佐の山内豊信、および宇和島の伊達宗紀・宗城父子などが名前を連ねていた。このメンバーの構成は、後に本人の死亡や政治的利害関係の変化などによって、少々の変化をみせながらも、「王政復古」まで維持されていくことになる。

本論文ではこの大名グループをその性格から「大名同志会」と「賢侯クラブ」に分け、宗城を中心に彼らの活動について検討した。主な研究の内容は、①「大名同志会」の接点と彼らの活動の性格は如何なるものであったのか、②伊達宗紀・宗城がなぜ、「大名同志会」の一員として数えられるようになったのか、③また、宗城は如何にして家格以上の指導力を発揮するこ

とができたのか、④「大名同志会」を活用しつつ、彼らは如何なる政治行動を取っていたのか、⑤彼らによって押し進められた最初の公儀改革の試みであった一橋慶喜「建儲」運動において「大名同志会」の絆はどのように活用され、その性格はどのように変貌したのか、⑥文久年間、政治的に復活した彼らが往年の絆を活用しながら「王政復古」に至るまで行った政治行動の中で、「賢侯クラブ」はどのように変貌していったのか、などに関するものである。

本論文における検討の結果、これらについては、以下のようにまとめることができる。

第一の、「大名同志会」の接点とその活動の性格に関しては、彼らが江戸城における詰所（「殿席」）や姻戚関係、「文武修業」の場を媒介として互いに密接かつ複雑に関わりを持ち合いながら、これらの接点を利用して同志会を形成していたことが分った。また、彼らは「大名同志会」を維持・発展させていくために、「会読」、「茶事」、「御庭拝見」、「私信」といった公式に許された場を借りて定期的で直接的な接触を図っており、とくに「会読」は彼らがそこから学んだ討論という手段を通して「議論する大名」として自己の政治的主張を表出する際に大きな役割を果たした。そして、「大名同志会」の性格も初期段階においてはごく普通の社交関係のようなものであったと言える。

第二の、伊達宗紀・宗城がなぜ、「大名同志会」の一員として数えられるようになったのかについては、その理由として①当時の宗紀が姻戚関係などをもって築き上げた人脈、②宗紀・宗城の個性、③宗紀の諸改革の成功による家政の安定化、④西洋に対する強い危機意識を抱いた宗城の、軍制と兵器の西洋化への努力などを挙げることができた。

第三の、宗城が家格以上の指導力を発揮できたのは、彼が天性とも言える「世話好きな性格」と「弁材」をもって、メンバーらをまとめる幹事の役割をつとめたこと、およびペリー来航以前から進めていた軍事改革への彼の強い意志などに求めることができる。

第四の、「大名同志会」を活用しつつ、彼らは如何なる政治行動を取っていたのかについては、彼らが対外危機への対抗を図るために、「大名同志会」の絆を活用しながら、主に対外情勢に関する情報の交換や蘭書の貸し借り、西洋軍事技術に関する情報交換などを行ったことが分かった。

とりわけ、「大名同志会」のネットワークを介して入手した蘭書による西洋軍事技術の導入にあたって、洋式銃砲の鑄造及び砲台の築造に関する情報と技術を提供し合い、火薬やその製造法を送るなど、公儀の禁制がなかった大砲と火薬製造に関して活発な情報交換を行っていたことを明らかにした。

阿片戦争以降、外圧に対する危機感を募らせた彼らは、西洋からの威圧に対抗するための準備の一連の過程で、ごく自然な個人的・社交的な絆から始まった彼らのネットワークを、時代動向への対応や相互の必要性などによって意識的・政治的な結社に転換させていった。それは、「大名同志会」メンバーらが危惧してやまなかった西洋の強力な軍事力による危機の現実化、

即ちペリー艦隊の来航以降の彼らが、禁裏を利用して公儀の政策決定への介入を試みたり、斉昭を「軍事総督」に就任させることで彼を盟主とするメンバーらの政治的結集を提唱したりするなど、公儀の政策決定に間接的な介入を試みていたことから分かる。

第五の、彼らによって押し進められた最初の公儀改革試みであった一橋慶喜「建儲」運動において「大名同志会」の絆はどのように活用され、その性格はどのように変貌したのかについては、宗城らがそれまでの絆を「衆議」の結集装置として活用しつつ、そこで結集された「衆議」をもって決行しようとした政治改革運動が一橋慶喜「建儲」運動であり、それを契機にして「大名同志会」が政党のような存在である「賢侯クラブ」へと変貌するようになったことを明らかにした。ちなみに、「建儲」運動が失敗に終わった後、他のメンバーらが次々と公儀の処罰を受ける中で、宗城だけは処罰を免れたのだが、そこには直弼に助力した養父宗紀の存在と公儀の大目付であった実兄山口直信の存在が大きく影響したことが分かった。

第六、文久年間に政治的に復活した彼らが往年の絆を活用しながら「王政復古」に至るまで行った政治行動の中で、「賢侯クラブ」はどのように変貌していったのかについて検討してみると、文久年間以降、全国政治の中心と化した禁裏の政策決定を主導することで、国政を担おうとした彼らの政治活動は、「大名同志会」以来続いた信頼関係に基づいたものであったが、ただ、各々の政治的な立場、とくに徳川家と関わる問題における彼らの政治行動の歩調は必ずしも一致していたわけではないことが分かった。

その後、「王政復古」によって明治新政府が樹立し、彼らは新政府の下で議定となり、職制の変遷のたびに高官に任ぜられたが、なぜか皆早い時期に辞職し、次々と政治の一線から姿を消した。また、新政府の中で薩・土のように藩閥を形成して明治初期の権力争いに参加したのもあったが、宇和島伊達家は家臣を送り出せず、新政府の方針に充実に従いながら、特別な政治行動を起こすこともなく廃藩置県に至った。

維新史の中で「賢侯クラブ」は、幕末期の最終段階におけるメンバーらの政治活動が目立ったために、はじめから権力を獲得する意図を持って成立した結社のように語られがちである。しかし、このグループの最初の姿はごく私的な関係から始まっており、私的な領域における絆が、時代状況に触発されて政治的な領域へと転換していったというべきであろう。また、このような政治的な領域において、彼らが自己の政治的な主張を表出することができたのは、それまでに学問をみかく場で「議論する」という文化を習得したからであった。このようにして彼らが打ち出した議論による合意という新たな政治形態は、後の近代の日本社会における議会制度にもつながるものであった。

本論文の中心人物である伊達宗城は、初期における「大名同志会」の中で、「世話好きな性格」と「弁才」をもって、そのつながりを強靱なものにするための幹事の役割を果たしたり、彼らのネットワークを維持しつつそれを政治的な連帯に変えるために努力したりするなど、個

性豊かな大名たちの意見を調整して一つにまとめるのに大きな働きをした。このような彼の資質は、文久年間以降、「賢侯クラブ」のメンバーらと政治行動を共にした時にも重要な意味を有しており、また、他の大大名に比べて財力と軍事力において大きく劣る宇和島伊達家の宗城が幕末期のみならず、王政復古後の新政府においても期待される大名の一人として数えられたのは、彼の資質とそれに基づいた政治活動の賜物であったと言える。

(終)